自発的な探究心を育てる学習

～「説明する力」を育成し，互いの考えを交流する学びをめざして～

谷口　佳都司

子どもたちのコミュニケーション能力や人間関係を構築する力の向上をめざし，様々な「ひと」「もの」「こと」との出合いを通じて，自分自身の考えを確立し，物事を主体的に判断できる力を育てる総合的な学習の時間にしたいと考えた。そこで，今年度の第４学年の総合的な学習の時間に扱う教材として，和歌山県の特産品「金山寺味噌」や３年後に開催される「紀の国わかやま国体」のことなどを取り上げた。子どもたちにとって，身近でよく知られている言葉であるものの，具体的な点ではっきり分からない事象でもある。だからこそ，多くの課題が生まれ，解決したい気持ちにさせる。子どもたちは，一つの事象をあらゆる角度から探究していく中で，今まで知らなかったことに触れ，「ひと」「もの」「こと」に出合い，子ども同士で意見交流しながら，社会性を育んだり自己の生き方を考えたりできると思い，効果的な総合的な学習の時間の進め方を研究してきた。

キーワード：金山寺味噌，紀の国わかやま国体，課題，探究，自己の生き方

１．互いの考えを積極的に交流するために

１．１．　探究していく学び

総合的な学習の学習における『学びをデザインする子どもたち』とは，一つの事象について，子どもたちが様々な「問い」を自分自身や仲間に投げかけ，互いの考えを交流しながら課題を主体的に探究する学びを創っていくことだと考えた。

今の子どもたちが，多様性・複雑性の強い傾向にある生活環境を生きていくためには，「どれだけ知っているか（知識・技術の習得）」よりも，「どれだけ探究できるか（方法の獲得）」ということに重点を置く必要である。つまり，「何を学ぶのか」だけではなく，「どのように学ぶのか」ということも大事なのである。

そこで，総合的な学習の学習を進めていくにあたっては，子どもたちには，受け取った知識や技術をただ鵜呑みにするのではなく，「どうしてそうなるのか。」「なぜなのか。」とさらに深い部分についても探究するように促してきた。

１．２．　子どもの対話力の充実

今年度の個人研究テーマを『「説明する力」を育成し，互いの考えを交流する学びをめざして』とし，総合的な学習の授業づくりの研究を進めてきた。

全体学習の場で，子どもたちが互いの考えを積極的に交流するには，一人一人の「説明する力」を育成し，対話力の充実を図ることが必要だと考えた。

この「説明する力」とは，自分の思いや考えをまとめ，自分の言葉で仲間にわかりやすく伝える力と考えている。そして，特に「話す力」「聞く力」を身に付けることである。どのようなことを意識して話したり聞いたりするのか，日頃から授業を通して適切な方法を教師の方から支援していくことを続けてきた。そうすることで，子どもが対象と真剣に向き合い，自分なりの気づきや考えを持つようになってきた。また，子ども同士で個々の見方や考え方を交流し，より深まった課題追究する学習へとつながるようにした。

１．３．　身近で，魅力ある教材の選定

子どもが夢中になり互いの考えを積極的に交流できる学習するために，子どもが問題意識をもち，「調べてみたい」「やってみたい」と強く思えるような教材を選定したりするように心がけた。

子どもが興味関心をもつ教材，感動を覚える教材，子どもにとって身近で実態に沿った教材などを選定し，身体を使った活動，知恵を働かせて行う活動，仲間と協同しながらの活動，直接体験を多く取り入れた。そうすることで，子どもたちがしっかりしためあてをもたせた。

２．　携わっている「ひと」との出会いを通して

前述のように，総合的な学習の時間で様々な「ひと」「もの」「こと」とかかわることによって，子どもたちは多くの気づきを得ることができる。そして，「今の自分」と「これからの自分」を比較することで自己成長を促し，未来の自分の生き方について見つめるのではないかと考えた。

特に，その単元の対象に深く携わっている「ひと」との出会いは，学習をより深める大切なことだと捉え，直接会う機会を可能な限り設けるようにしてきた。見学先で働いている「ひと」や，教室へゲストティーチャーとして来てくれた「ひと」から，専門的な知識や方法，あるいは経験したことを教えてもらうことによって，子どもたちがその対象に迫り，課題を自分事としてとらえるきっかけとなる。さらに，その「ひと」が真剣に取り組む姿勢，思いや願い，知恵や工夫の素晴らしさなどを感じ取り，表面的には見えにくい部分のことも学ぶことができる。

自分たちと関連性がないと捉えてきた学習が，正に自分自身にかかわった学習へと発展し，自ら問題を発見し，主体的に探究しようとする意欲が芽生える。そして，積極的な子ども同士の考えの交流が可能となり，子どもたちの自発的な学びへつながると考えた。

３．　単元学習の実際

ここでは，『今，ここがすごいよ！ふるさと和歌山』という年間テーマで実施した４年Ｂ組の総合的な学習の２つの単元学習の実際について報告する。

３．１．『県特産品「金山寺味噌」』より

３．１．１．　子どもたちから見た「金山寺味噌」

本実践の主張点を『一つの和歌山の特産品に着目し，地域の「ひと」「もの」に出合い，深く学んでいくことで，主体的に解決していく態度や能力が育つ。』とし，和歌山県の特産品「金山寺味噌」を教材として扱った学習を行った。

単元の初めに，学級で「金山寺味噌」についてのアンケート（２８人）を取った。学級の子どもたちの半数が「金山寺味噌」を知らないということ，食べた経験がある子どもは６人であることが分かった。また，子どもたちに直接聞いてみると，「金山寺味噌」が和歌山県の特産品であることを知らない子が大勢いた。勿論，どこでどのように製造されているのかを知らないことも分かった。子どもたちにはあまり馴染みのないものだということで，この単元を進めていくのは難しいと考え，有田市内にある『Ｔみそ麹店』の職人さんに製造方法などについて教えてもらうことを依頼し，金山寺味噌と子どもたちとの距離を縮めることにした。

３．１．２．　職人さんの技と心を学ぶ

この単元で，職人のＴさんと出会えたのは４回あった。初めにＴさんと出会ったのは，Ｔみそ麹店の工場に見学に行った時であった。

工場では，麹を作る工程を見学させてもらった。米・麦・大豆を蒸し，種麹をつけるところや，むしろ・もろぶたに移し，保温室（３０度前後の部屋）へ入れるところを子どもたちは実際に見ることができた。蒸し上がった時に出る湯気や香り，Ｔさんの手作業の様子や真剣な表情，工場の中に置かれている沢山の道具など，子どもたちにとっては初めて見たり感じたりしたことばかりであった。Ｔさんとその奥さんが二人で協力し，真剣な表情で手際良く一つ一つ丁寧に作業をする様子を見ることができた。Ｔさんの仕事に対する熱意や思いを子どもたちなりに感じたようであった。

工場を見学してから一ヶ月後，金山寺味噌の仕込み体験を実施し，ゲストティーチャーとしてＴさんに学校へ来てもらった（図１）。子どもたちは，Ｔさんにやり方を指導してもらいながら，ウリやナスを包丁で切ったり麹を細かく砕いたりする作業をした。材料を混ぜる作業については，Ｔさんが子どもたちの目の前で実際に作業をやってみせてくれた。子どもたちの感想の中には，「金山寺麹と色々な野菜をすごく手早く混ぜていた。」「金山寺味噌を作るのは時間と手間がかかることがわかった。」「野菜の切り方をわかりやすく教えてくれた。」というのがあった。仕込みの一連の作業工程と，職人さんの熟練した技の素晴らしさがよくわかり，金山寺味噌がより身近になった。

図１　　金山寺味噌仕込み体験の様子

３．２．『３年後の「紀の国わかやま国体」』の実践より

３．２．１．　国体とはどんな大会なのだろう？

本実践では３年後に開催予定である「紀の国わかやま国体」を教材として扱い，全国のスポーツ大会である国体（国民体育大会の略称）の素晴らしさを発見していく単元構成を考えた。「紀の国わかやま国体」が３年後に開催が迫っているが，どんな大会であるのか，国や県が何の目的でこれ程までに力を注いでいるのか理解されていないのが現状だと推察した。以前の「黒潮国体」が４１年前のことなので，子どもたちは勿論のこと，子どもたちの親の世代も当時の様子をほとんど知らないのが関係すると考えた。また，毎年の和歌山県選手団の活躍や結果・様子について，詳しい情報が一般の人々にはなかなか伝わらないことも影響していると考えた。

この単元を通して，子どもたちには国体がどのようなものであるかを理解させ，興味・関心をもたせるようにしたいと考えた。３年後の「紀の国わかやま国体」では，自分たちのふるさとで国体を開催する喜びと感動をしっかり味わい，何らかの形で参加したり，会場へ行って応援したりするようになってほしい。そして，子どもたちが「和歌山って，すごいよ！！」と自慢できるくらい，もっと和歌山県を好きになることを願った。

３．２．２．　「黒潮国体」当時の様子を学ぶ

「紀の国わかやま国体」については，今現在開催に向けて準備をしている段階ということもあり，３年後の国体で実際にどんなことが行われるのか想像しにくい。そこで「黒潮国体」当時の選手や運営委員だった「ひと」にその時の様子を教えてもらうことにした。

本単元の第８～１１時に，ゲストティーチャーとして，Ｔさん〔黒潮国体最終炬火ランナー，陸上競技の女子４００ｍの元日本記録保持者〕と，元県教育委員会保健体育課のＹさんの２人に４年Ｂ組教室へ来てもらい，「黒潮国体」について話をしてもらった。

Ｔさんは，黒潮国体開会式で炬火を持ちながら走っている当時の写真パネルを持ってきて子どもたちに見せてくれた。（図２）

図２　Ｔさんから，黒潮国体最終炬火ランナー・選手としての体験や様子の話を聞く。

炬火を持って走った時，選手として競技で走った時などの気持ちを教えてくれた。Ｔさんは，子どもたちの一つ一つの質問に笑顔でわかりやすく答えてくれた。

Ｙさんには，黒潮国体当時の様子や戦後からの国体の流れなどについてお話をしてもらった。また，子どもたちは，分からない点や疑問に思う点について色々質問した。（図３）

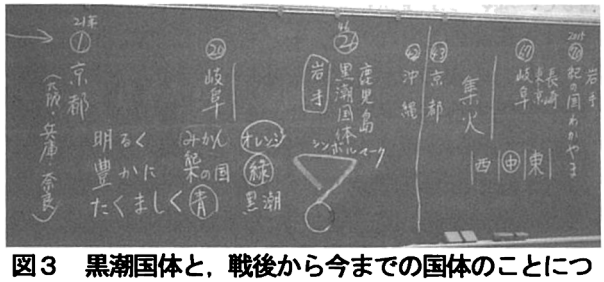

図３　黒潮国体と，戦後から今までの国体のことについて（Ｙさんの板書より）

第１回国体が京都で開催された理由，黒潮国体の総合開会式のときのエピソード，シンボルマークやスローガンの意味についてなど，子どもたちが今まで全然知らなかったことをいっぱい教えてもらった。国体が戦争と深く関係していたことや，国体開催の意義や目的などがよく分かった。炬火リレーの仕組みも詳しく教えてもらい，前回のゲストティーチャーのＴ選手が最終炬火ランナーとして走った責任の重みを改めて理解することができた。

３．２．３．「紀の国わかやま国体」開催に向けて進められていること

本単元の第８～１１時に，県庁競技式典課班長のＩさんにゲストティーチャーとして来てもらい，特に国体の競技面についての話をしてもらった。（図４）

図４　開催準備のことや，今現在の和歌山県のスポーツ競技力についての話を聞く。

和歌山県は昨年の「おいでませ！山口国体」で総合４３位の成績だったが，今年の「ぎふ清流国体」では一気に２１位に順位が上がり，これから３年後に向けて，競技力向上をさらに行っていくそうだ。でも，和歌山県は人口が少ない方であるため，競技者人口も少なく，なかなか上位に上がっていくのが難しいことも教えてもらった。マスコットキャラクター「きいちゃん」について子どもたちはとても関心があり，どのようにして決まったのか，きいちゃん誕生のいきさつやマスコットキャラクターが重要な役目を果たしていることを知った。

４．授業の考察

【対話について】

金山寺味噌の学習の第３次では，「Ｔさんの作った金山寺味噌のいいところを見つけよう」という課題で話し合わせた。（表１）

（話し合いの途中から）

Ｃ15　‥‥「（Ｃ25）君は刺激があると言ったんだけど，分かりやすく言うと，ピリッとした感じ。甘いんだけどちょっとピリッとした感じ？」

Ｔ‥‥‥‥「この中にピリッとするものってあるの？

Ｃ全体‥‥《つぶやき》「ないない。」

Ｃ15　‥‥「味としてピリッとするの。」

Ｔ‥‥‥‥「味としてピリッとするんだね。」

Ｃ24　‥‥《つぶやき》「人によって違うと思う。」

Ｃ13　‥‥《つぶやき》「ピリッとせえへんやろ。」

Ｃ８　‥‥「金山寺味噌の中に，野菜とか麦とかいろんな物が

入っているから美味しい。」

T……「これもいいところなんだね。」

C25 ……「慣れた手つきでやっている。」

T……「なるほど。付け加えとかない？」

C22 ……「何か聞いたことだけど，何で普通の味噌と違う金山寺味噌を作っているのかっていう質問をしたら，金山寺味噌は和歌山の本場なので買いたいと思うお客さんが多いから・・。」

C 5 ……「次も食べたくなる味。」

T……「何で次も食べたくなるんやろ？」

C 5 ……「美味しいから。」

C24 ……「味が濃いから覚えやすい。印象的やから。」

C24 ……「（C 5）君の「また食べたくなる，」という意見に，自分なりの意見としては，独特の味がして１回食べたら味が濃くて忘れられない味。」

C28 ……「柔らかい感じで好き。」

C25 ……「金山寺味噌は具だくさんだからそれだけで全部補える。」（後略）

表１　「Ｔさんが作った金山寺味噌のいいところを見つけよう」（授業記録）

たくさんの種類の野菜などが入っていること，独特の味や食感などに関する意見が出てきた。子どもたちが個々で金山寺味噌のいいところをたくさん発見していた。他の子の意見に続けて自分の考えを積極的に発言する姿が見られた。おそらく，それまでの学習の中で，スーパーで売られていた金山寺味噌やＴさんの金山寺味噌を食べ比べたことや，金山寺味噌と一緒に茶粥を食べたことが子どもたちにとって金山寺味噌の特徴を知る大事な経験になったと考える。また，C25の「慣れた手つきでやっている。」などの発言から，Ｔさんの技や経験を意識していることも伺えた。しかし，Ｔさんの凄さに迫っていけそうな発言が何度かあったものの，具体的に深く触れていくことができなかった。この時間では，Ｔさんの作る金山寺味噌のことではなく，主に一般的な金山寺味噌のいいところを出し合うことに留まった。もう少し話し合いが発展していれば，道具などの衛生面の管理，長年培われた経験や勘，材料の選び方など，職人のＴさんだからこそできることにもっと目を向けさせることができたと考える。教師の方から，適切に問いかけや聞き返しをしていれば，話し合いがもっと深まるチャンスがあったと感じた。

【探究について】

意欲を持って自発的に探究するには，単元を通して何を学んでいきたいかということを子どもたち一人一人が明確に持っておくことが大切だと感じた。そして，教材が子どものニーズに合ったものであり，日常生活の中では分かりにくいものであったからこそ，自然に問題が見え，課題が生まれたと感じた。また，教師が子どもたちの願いや思いに寄り添い，一緒に悩み，試行錯誤しながら「ひと」「もの」「こと」と出合う機会を設定することで，課題に迫っていく学習になると思われた。

新聞や資料，書籍などで調べたことを基に，課題について意見を交流することは可能であるが，「多分○○だから，○○については○○だろう。」というような予想に予想を重ねていく話し合いの展開になってしまう。やはり，携わっている「ひと」と出会い，その「ひと」の仕事をする様子を実際に見たり，その「ひと」の経験話を聞いたりすることが真実を確認するチャンスなのだと考えた。そして，その「ひと」だからこそ得られる貴重な情報なのだと改めて強く感じた。このようなことを「ひと」からどうすれば引き出せるのか，その方法を考えることも大事な学びであり，子どもたちの探究心が育つと考えた。

５．研究の成果と今後の課題

２つの単元の実践によって，子どもたちが今まで知らなかった様々な事象に目を向け，深く考える機会を与えることができた。

金山寺味噌を食べた経験がない子どもが多数いたにもかかわらず，みんなで考えたりＴさんに教えてもらったりしたことで，材料や製造工程は勿論，詳しい特徴や魅力まで発見できた。そして，Ｔさんの仕事に対する思いや熱意に気づき，物事に真剣に取り組む姿勢を感じ取ることができたのも大きな成果であった。

また，国体についても，「黒潮国体」と「紀の国わかやま国体」の運営に関係した「ひと」にゲストティーチャーとして子どもたちの学習にかかわってもらったことで，国体の仕組みだけではなく，準備や地域の動き，スローガンなど細かい点にも目を向けさせることができた。

「説明する力」の育成をめざして学習に取り組ませてきた。授業の考察でも述べたように，積極的に自分の考えを発言する力は付いてきた。しかし，対話力の定着はまだまだ成されていない。もっと互いの考えを交流させ，一歩踏み込んだ新たな発見ができるように指導を続けていきたい。それから，教師の発問の仕方を工夫し，話し合いが本筋から離れても，流れを修正できるよう，予め子どもたちの意見を予測しておきたい。

今後も，更に探究心を湧きたて，子どもたちの視野を更に広げていけるような総合的な学習の時間の研究を続けていきたい。

参考文献：

（1）文部科学省　国立教育政策研究所　教育課程研究センター　２０１１年　「総合的な学習の時間における評価方法等の工夫改善のための参考資料【小学校】平成２３年１１月」教育出版

（2）嶋野　道弘 編著「小学校新学習指導要領の展開　総合的な学習編　平成20年版」明治図書